

鹿児島県の離島にある与論徳洲会病院では、入院中に終末期を迎えた患者さんを、ご家族が自宅に連れ帰り、家で看取するという習慣があります。終末期に家に帰すのは、いかがなものかという意見もあるでしょう。家族が少ない家庭では、ケアするマンパワーの問題もあり、連れ帰りがたくてもできないこともあるでしょう。しかし、私は個人的には、この習慣に大賛成です。医療は、すべての人間の営みである生病死に深くかかわらなければなりません。死の悲しみを家族で分かち合い、生前の故人に思いをはせて、その死を乗り越えていく力に変えることは大切なことです。

人口統計を見ると、2020年に約137.3万人が亡くなりました。そのうち約38万人約28%が悪性新生物で死亡しています。がんという病気は、いまだに死に至る病と認識されていますが、ほとんどが慢性の経過をたどり、がんと診断された方の半数は、5年以上生存しています。病状が進行し病を治す治療ができなくなった時、緩和治療に移行します（本来、早期から心のケアを含む緩和治療を始める必要があります）が、在宅は、ある意味で最も有意義な緩和治療の場となります。

今まで元気に生きてきた人生 そのものに意義があると悟る

「治療ができなくなったら、自宅の畳の上で亡くなりたい」。昭和の時代は半数以上の方が自宅で看取られていました。当時の年間死者数は67・78万人でし

在宅での安心感は闘病に余裕をもたらす 入院中めったに見られない笑顔も見える

死の直前までどうやって生きるかが一番大切

古河総合病院(茨城県) 院長

福江 眞隆



現在は約140万人の90%以上が病院で亡くなっています。看取るために年間100万床以上が必要となる計算です。がんが進行すると、抗がん剤ではコントロールできず、PD（進行）となっていきます。がん性疼痛を主体として食欲は低下し、衰弱、悪液質に陥り、さまざまな問題が生じます。麻薬系鎮痛剤をうまく利用して疼痛をコントロールし、栄養投与のルートを確認して病勢をコントロールすることが、終末期医療に携わる医師の技量の見せ所です。そこに、もうひとつ重要な要素があります。それは、患者さん自身の心がコントロールできているかどうかです。穏やかな精神状態は、痛みや苦しみを取り除いて初めて実現するものですが、在宅に在るこの安心感、いかなる精神安定剤よりも強力に働くことがあります。穏やかな心は患者さんの安寧につながり、闘病の余裕につながります。ひいては余命を伸ばす効果があるように感じます。さらに病院での終末期患者さんのベッドを減らし、医療費削減にも貢献することです。

当院では常勤医師が訪問診療を行っています。外科は、とくに終末期のがん患者さんが多く、緩和治療に終始するのですが、そのなかで貴重な発見があります。患者さんの表情です。往診すると、「よく来てくれました」と笑顔を見せてくれるのです。入院中の病室では、めったに見られませんが、患者さんのお宅を見ることで、その方の人となりを知ることができます。

訪問看護ステーションと在宅診療をともに続ける

死に方にも良い悪いもありませんが、よく生きた人ほど良い死に方をしている気がします。先日、『新婚さんいらっしゃい!』というテレビ番組を見ました。20年前に亡くなったお母さんが、余命半年と宣告されたつも当時1歳だった一人娘に動画メッセージを残していました。「人生は一度きり。悲しいこともあるけれど、泣いて生きるより、笑って生きたいから、涙は見せないんだ」と、笑顔で成長した娘に語りかけていました。そこまで強くはなれませんが、強く生きている患者さんが、少しでも心穏やかに在宅療養ができるよう、訪問看護ステーション（はなもも）や、同「げやき」とともに、在宅診療を継続したいと思えます。皆で頑張りましょう。



(1面から続く)

同院は「大腸がん内視鏡治療（ESD）」でも168件で全国12位に入り、地方別では宇治病院が29位に入っている。

岸和田病院の消化器内科は尾野巨匠院長、井上太郎・副院長兼内視鏡センター長が中心となり、内視鏡検査・治療件数は年間約1万9000件（19年）に上る。加えて、グループの離島・へき地病院を中心に20病院以上に對し医師を派遣し、積極的に応援診療に取り組んでいる。

「前立腺がん治療」の全国13位にランクインしたのは東京西徳洲会病院。治療数は253件、うち228件は放射線治療が占めた。地方別では湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）が161件で26位、南部徳洲会病院（沖縄県）が119件で7位。

このほかのがん治療でも、複数の徳洲会病院が地方別ランキングに登場している。「肺がん手術」で和泉市立総合医療センター（大阪府）が13位、「食道がん手術」で岸和田病院が21位、「肝がん手術」で千葉西病院が29位、「肝がんアブレシオン」で八尾病院が24位、和泉医療センターが29位、「膀胱がん手術」で岸和田病院が24位、「胃がん手術」で岸和田病院が28位、「子宮・卵巣がん手術」で和泉医療センターが30位に



長期残存するケースも 新型コロナ罹患後症状

【続報】新型コロナウイルス感染症の特徴のひとつに、罹患後長く残る症状がある。どのくらいの頻度で残るかは、まだはっきりしていないが、診断/発症/入院後2カ月、もしくは退院/回復後1カ月を経過した患者さん9,751例のうち72.5%に何らかの症状があるという系統的文献レビュー結果がある。また診断6カ月後も525例のうち約10%に何らかの症状があったとの国内の追跡調査報告があり、罹患後症状はレアケースではない。

なかには罹患当初は無症状、もしくはごく軽症だったにもかかわらず、なかに倦怠感など症状が強くなることもあるという。最も多い症状は倦怠感（40%）で、息切れ（36%）、嗅覚障害（24%）、不安（22%）、せき（17%）などが続く。大部分はその後改善するもの、なかには長期残存し学業や就業など社会生活に大きな影響が出てしまうこともある。ワクチンを2回接種した場合は28日以上残る症状の割合が半減するとの報告もあり、罹患後症状の予防という観点からもワクチン接種が注目されている。

オミクロン株に罹患後症状が強くなるという報告は今のところないが、症状が比較的軽いと言われているにもかかわらず、罹患後症状で苦しむ人の報告はあり、そもそも感染しないための対策が重要となる。厚生労働省の事業で、罹患後症状についての診療の手引きが昨年12月に発行され、これまで手探りだった治療法に一定の方針を示している。

代表的な罹患後症状

全身症状	呼吸器症状	精神・神経症状	その他の症状
倦怠感・関節痛 筋肉痛	せき・喀痰・ 息切れ・胸痛	記憶障害 集中力低下・不眠 頭痛・抑うつ	嗅覚障害・ 味覚障害・動悸 下痢・腹痛

それぞれランクインした。がん治療のうち、がん放射線治療とがん薬物療法に関しては都道府県別に上位の施設を掲載。「がん放射線治療」で上位に入ったのは、湘南鎌倉病院が408件、宇治病院が240件、和泉医療センターが302件、南部病院が645件、南部病院は前年の477件から168件増と大幅に件数を伸ばしたのが目立つ。

同院は12年に沖縄県で初の高精度放射線治療装置「トモセラピー」を導入して以来、放射線治療科と他診療科が連携しながら治療に尽力。また同院は20年6月、沖縄県で初となる最新の定位放射線治療装置「サイバーナイフ」を導入。腫瘍の形状に合わせて集中的に放射線を照射でき、正常組織へのダメージを最小限に抑えながら高い線量で治療を行うことができる。がん放射線治療に関しては、さらに「IMRT（強度変調放射線治療）」実施患者数が多い病院として、湘南鎌倉病院が400件で全国10位、南部病院が326件で15位に登場。IMRTは、がんの形状に合わせて放射線照射を行うことで正常組織への影響を減らし、副作用の発生を抑える技術だ。サイスの小さながんにも集中して高線量を照射する「SBRT（体幹部定位放射線治療）」は、南部病院が197件で全国6位に入った。

近年、免疫チェックポイント阻害剤など進展が目覚ましい「がん薬物療法」は、札幌東病院や千葉西病院、湘南鎌倉病院、湘南藤沢病院、和泉医療センターがランクイン。同書では、ダウインチによる「がんロボット手術」についても、疾患別手術数の全国ランキングも掲載。対象は保険適用となっているがん種。直腸がんや千葉西病院が19位、同院は前立腺がんでも35位にランクインした。

脳の病気のカタゴリーのうち「脳血管疾患治療」で岸和田病院と宇治病院が地方別でランクイン。骨・関節の病気のカタゴリーのうち、「首・腰の手術」で湘南藤沢病院が地方別25位。同院は難易度の高い重度の脊柱側弯症治療に力を入れており、ランキングでは触れられていないが、同治療では全国トップクラスの実績だ。「人工関節置換術股関節」では、湘南鎌倉人工関節センター（神奈川県）が605件と5位に入った。「人工関節置換術膝関節」では湘南鎌倉病院が地方別26位だった。